

第6回・農村女性についての研究会（仙台）

東北大学 細谷昂

報告者：阿部和枝（聖和学園短期大学助教授）

テーマ：私と農村女性との出会い

日時：1995年1月28日（土）

場所：東北大学大学院情報科学研究科（第二片平分室）

表記のテーマで、聖和学園短期大学助教授の阿部和枝氏に報告していただいた。阿部氏は、東北大学農学部生活科学科卒、現職につかれる前は、宮城県農試、農業センター、農業実践大学校などで、とくに「生活」分野の研究と指導にあたられてきた方で、お話はまず、これら県の機関でたずさわってきたお仕事の内容の紹介から始まった。県農試の生活研究担当となって生活研究とは何をすればよいのかと模索するなかで、経営と生活との接点という意味で「家族経営」と出会い、以後ずっとこのテーマにとりくんできたとのこと。次いで本論に入って、「家族経営のなかでの婦人」について述べられた。以上のようなことで、当然、農家家族に関心をもつことになったが、そこで決定的に重要だったのは、東北大学の竹内利美先生の、「貴女達は、農家は封建的だとか、農村の婦人の表情が暗いとか切って捨てるようにいうが、あの人は好きでそうしているわけではない。何故そういう状況にあるのか、いろいろな角度からみてごらん」ということばだった。「その頃から私は、農家家族の存在をまず肯定し、理解しようとする態度が身についたように思う」。

1970年代、農業構造改善事業が進められ規模拡大路線を歩むころ、大規模経営の成立条件の研究をおこなったことがある。それによると、親から経営権を譲り受けた後、しばらくの技術蓄積期をへてほぼ38歳ころからの経営活動期に規模拡大しているケースが多いことが判明した。つまり、調査対象になった、稲作でいえば15～18歳という宮城県下有数の大規模経営であっても、「個別農家の規模拡大は、家族労働力の盛衰すなわちライフサイクルに対応しておこなわれており、企業化とは異質なもので、結局「家族経営の本質を変えておらず、すぐれて家族経営的な対応を認めることとなった」のである。

また、ここで明らかになったのは、直系二世代家族が一般的だが、そのなかで「生産面での部門分担が深化し、所得の配分方式においても世代単位の収支というかたちで定着する。また生活面でも世代単位家事、家族全体の共通的家事の区分が顕在化し、世代を単位とする責任分担組織としての性格を強めている」ということであった。

阿部氏のはじめでの農村女性との出会いは、学生時代だったが、そのときの印象が農村女性の「原型」として脳裏に焼きついている。暗さ、つかれた表情、無表情などなど。「今だれもないからっしゃ、人いるときに来てけさい」という嫁。しかし今日では、30歳代の若妻が家や村のなかに閉じこもらず、どんどん外へでてゆく。福祉関係のボランティア・グループの責任者をしている農村女性。しかも、一人一人がみんな違う。多様化した。

討論の内容を詳しく紹介することはできないが、一点だけ。阿部氏によると、上に紹介した調査の段階では問題意識は世代ごとの夫婦単位の自立化にあったという。これは、現在からみれば不十分な点といえるかもしれないが、しかし当時の実態からすれば当然の問題設定だったと筆者は考える。以上のような歴史的变化をふまえて、いま農村女性の問題はどのように問われなければならないのか、そこにわれわれの課題があるといえよう。